

## 「今井屋旅館一泊ラン」 2014年 11月

荒川サイクリングクラブ 石原氏を偲んで



名水「毘沙門の水」にて

このツアーは「荒川サイクリングクラブ」さんによる呼びかけの合同ランです。荒川 C.C.に会長として長く活躍されていた石原さん。その自転車活動は個人の趣味の領域にとどまらず、町興しや文化講演など社会に向けて発信するサイクリストとしての「表現者」でもありました。

石原さんとは、各地のサイクリング大会や自転車イベントでお会いする以外にも、ヨコハマミナトサイクリングクラブ (YMCC) 創始者である島田さんのお店「ヨコハマ サイクリングセンター シマダ」を訪ねていたり、YMCC 会員と交歓してくださったりと思い出は尽きません。

参照：荒川ゆうネットアーカイブ 2006年

「荒川区オススメサイクリングロード」

[http://www.city.arakawa.tokyo.jp/unet/issue/0605\\_2/](http://www.city.arakawa.tokyo.jp/unet/issue/0605_2/)

参照：荒川区環境課 2012年 あらかわ環境サロン

「荒川サイクリングクラブの活動」

<https://twitter.com/arakawakukankyo/status/242897591296204800>

当日は西武秩父駅前で乗機を組立て出発です。YMCCからは3名が参加させていただきました。行程は荒川サイクリングクラブのみなさんがご案内してくださいまして、矢久（やきゅう）峠を越えて群馬県南西部の神流町（かんなまち）へと進出しました。

宿泊は味わい深い木造旅館「万場今井屋旅館」です。石原さんがこの地へツーリングする際に常宿とされていました。創業350年を迎え、現在の建物は約100年前の建築なのとか。

今井屋旅館は街道に面した側から眺めると信濃の国、海瀬へとつながる十国峠街道の宿場町にふさわしい佇まいです。入館すると重厚な帳場に電

話開通初期の頃と思われる電話室が設置されていました。増築を重ね（と察しました）、内部は二階だか中二階だか三階へ行くのだから迷路のような廊下が巡っています。長年の通行により階段の片端ばかりが減って、まるで傾いているかのように錯覚しました。今回ツアーの参加者は 34 名。石原さんも陰膳で参加されたのでしょうか。宴会の盛り上がったことと言ったら、その呑み盛り食べ盛りようは思い出すのも畏れ多いです。

翌日わたしはツアー本隊から離脱し、街道をすこし戻って神ヶ原（かがはら）へと移動しました。隣の上野村のその次は長野県、という山奥に博物館がありまして、正式名称を「神流町恐竜センター」と呼びます。恐竜センターにはこの地で発見された恐竜やアンモナイトの化石などが展示されています。わたしは昼前に入館しまして、丁寧に見学していたら 3 時間も滞在していました。恐竜好きの向きにはじつに想像力を刺激される展示です。この博物館を運営する学芸員の方々の創意工夫に敬服します。また地域の人々と行政の深い理解があるのだろうと推察します。



レポート冒頭の写真は、矢久（やきゅう）峠登り口の名水「毘沙門の水」にて  
搭乗機はウエハラ・クラブモデル

写真左上：「神流町（かんなまち）恐竜センター」の館内展示

写真右上：同館の中庭にある大型肉食恐竜の化石（レプリカ）

写真左下：この地に暮らしていた中型恐竜、「サンチュウリュウ」の復元模型

写真右下：館内食堂の「恐竜カレー」、恐竜形のナゲットと恐竜卵が古代を想起  
します



単独行で探訪した恐竜博物館。この博物館から約 3km の場所、国道 299 号線に白亜紀の地層が露出しています。その後の地殻変動により、現代に岩壁となって姿を現したものです。「さざなみ岩」と呼ばれるこの場所に化石として残った恐竜の足跡があります。これを見学するのが今回ツアーのもうひとつの目的です。下段に載せた崖写真はこの場所にて撮影しました。



「さざなみ岩」にて

写真の上方に幾つかの穴が見えます。大きさはチェンリングの直径くらいです。これは白亜紀に恐竜が歩いてつけた本物の足跡です。中央下方から上方へ向けて、直線的に続く小さな足跡群もご注目あれ。遠く 1 億 3 千万年前に恐竜が歩行した情景を想像し、言葉に表せない興奮を覚えました。

足跡化石にいたのが午後 3 時、ここから秩父鉄道線秩父駅までまだ約 40km あります。この間に志賀坂峠という山越えをしなければいけない。恐竜の余韻に浸りつつ、せっせと峠をめざしました。まだ残照のあるうちに峠を越え、薄暮となった国道 299 号線を急いだのですけれど。あとすこし、秩父駅まで 10km ほど残して小鹿野町（おがのまち）で遂に日が暮れました。

ここからはランプを点灯しておよそ 1 時間の残業になります。真っ暗になった国道を秩父に向けて淡々と進みました。日暮れの独り旅にはソービ

ツツ製小型ダイナモの作動音、同じく砲弾型ランプの配光が頼もしいです。ダイナモローラーがタイヤ側面に接して発する作動音は、わたしには自転車がなにか囁いているように聴こえます。

特筆すべきは、ランプの電球として現代 LED 技術によるものに換装していることです。この自転車用 LED 球は、一般的な 6V3W の交流電源を供給するダイナモ発電機に適合します。タングステン球よりも白色光で明るいこと。また発電負荷が 0.5W と少ないので、ダイナモのローラー回転が軽くなり発電するダイナモの寿命も延びること。ダイナモ作動中であっても自転車の軽快な走行感を損ねないこと。これらが大きな利点だと感じます。たったひとつの部品が、それも指で摘まめるくらいの小さな LED 球が自転車の夜間走行性能を飛躍的に高めました。

自転車用 LED 球の開発は、ヨコスカサイクリングクラブ会員にしてエスカ OB 会の星野氏も関わっています。彼の説明では、サイクリング用途を意識して IC 定電圧回路を設計し LED 球の口金に組込みました。これにより徒歩で自転車を押すくらいの低速走行であっても明るく点灯します。また高速走行や荒れた地道を行く際にも、タングステン球のように発電の過負荷や路面の振動によりフィラメントが切れて失灯することがありません。LED 球には放熱対策が施されているので、ランプ本体は既製品のまま使用できます。ランプソケットは加工せずに LED 球をそのままねじ込めるということも実用的です。

2014 年ノーベル物理学賞に 3 名の日本人研究者が選ばれたことが記憶に新しいですね。この方々の発明した青色 LED の技術を用いて、明るくエネルギー消費の少ない白色光源が実現されました。自転車用 LED 球もノーベル賞受賞技術を社会の裾野で実用化したもののひとつと申せましょう。

この 2 日間は自転車ツーリングの醍醐味を十分に堪能しました。少々の荷物と食糧飲料水、工具など携行して走るクラブモデル。泥よけのある古典的な外観ですが、全天候型なので雨天とか夜間でも先に進みたいときじつに頼りになります。

荒川サイクリングクラブのみなさんお誘いありがとうございました。石原さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

文と写真大湖「今井屋旅館一泊ラン」以上